

# 京鹿子

创刊于1954年  
（原《鹿子》）  
（原《京鹿子》）



4月号

鈴 鹿 呂 仁  
拾 掬 集 その十九

寒 明 け や 前 略 と す る 誘 ひ 文

保 父 さ ん を 求 む ポ ス タ ー 犬 ふ ぐ り

春 し ぐ れ 瘡 蓋 の 取 れ ひ ら が な に

春 し ぐ れ 一 つ の 嘘 に で こ つ つ く

一 客 の 出 口 に 遠 し 焼 栄 螺

口 笛 は う ぐ ひ す 餅 の 時 の こ 糸



母 独 り 齒 車 合 は す 花 の 昼  
付 き ま と ふ 吾 が 二 重 あ ご 春 の 蠅  
売 り 家 や 偽 称 を 通 す 恋 の 猫  
伸 縮 の 右 脳 の 螺 子 や 三 寒 四 温  
鈴 の 緒 の 振 れ 巾 に 吉 東 風 吹 か す  
神 山 へ 祈 り の こ だ ま 山 笑 ふ  
山 の 春 鳥 居 の 巾 に 行 き 交 へ り  
肩 の 荷 や 重 か る 石 に 春 こ ぼ す

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

福財布

こよなきや千の鳥居に聴く初音

啓 蟄 の 神 の 山 よ り 動 悸 音

春 の ゆ め 萌 さ ぬ や う に 福 財 布

— 追 懐 — ( その 二 十 九 )

着倒れの都馴れして春小袖  
〔平成十二年作〕

極道のからす一喝二月逃ぐ  
〔平成十二年作〕



—近 詠—

和田 照海

福山支部発足五十周年記念

「淡墨桜」植樹

御 幸 野 の 要 淡 墨 桜 植 う

す め ら ぎ の 丘 の 芯 な る 植 樹 祭

夕 爾 の 電 車 快 笛 添 へ て 植 樹 祭

植 ゑ ら れ て は や 名 桜 の 性 も て る

揚 雲 雀 称 ふ 高 さ を 植 樹 了 ふ



## 英華採集

雪降るか狂はぬほどの赤を着る

習志野 上野 紫 泉

大都会に大雪が降ると都市の機能が麻痺し、東京へ向かう通勤通学の足が奪われ大混乱を招くことになる。上五の「雪降るか」には、「そこまで降るのか」という呆気に取られた感じを含ませているが、大雪に対する対抗心が湧き出てきたのであるうか。狂わない程度の赤を着ると言い切った作者の強い内面を見るようで心地良い。

ダンブ発つ陽炎を積み残しては

青 梅 金子 野 生

大規模な再開発が行われている工事現場では、毎日のように掘り起こされた「ずり」をダンブが処分場へ運び出している。これから建設されるであろう建造物は人々の役に立つものであるが、取り壊されて失った自然を代償としている。季語の「陽炎」は、人間が失った様々な物を揺らしているのである。積み切れない物は、掛け替えのない物であろう。

底抜けの空へ放水出初式

草 津 倉 橋 あつ子

消防団員が勢揃いして行なう消防演習の新年行事である出初式。本来の放水は、何か目的物に当たってその役目を果たすことになるがこの放水は空へ向かつてのもので何物にも当たらない。底抜けの空であるが故に空の中へ消えてしまったのだ。季語の「出初式」の持つ伝統行事を華やかに詠んでいる。

松本 鷹根

卒寿の影

中天の寒満月に歳糺す

水仙の群れ咲く笑顔湖眩し

雲亘てて遠嶺に仄と陽を零す

早春の空に声あり大櫓

下萌の土手に卒寿の影伸ばす



## 近 詠

塩貝 朱千

立 春

白昼夢雪のロンドの舞ひ止まぬ

しんしんと雪の囁き乱歩の夜

窓は雪とろんと女性専用車

パセリ噛んで血を青くせりけふ立春

パースデイカードの届く春立つ日



神麓集

春 水 藤岡紫水

振り直しきかぬ人の世絵双六  
福引や下戸が当てたる特級酒  
朱の椀にほどよき七分齋粥  
初場所や裁きも見事立行司  
澄むといふ昏さもありて春水

夕ざくら 沼田巴字

金堂のうしろ暮れけり夕ざくら  
手を挙げでわかれ別れや月朧  
春愁や橋は名残りの名をとどめ  
巨(おお)巖(いわ)に波また波や海道忌  
衿もとをさびしがらせて散るさくら

春 光 丸井巴水

目覚め良き蛇がのらりと遮れり  
齧られし膝が頼りの蓮根掘り  
壺焼の匂ひまとひし猫を抱く  
春光の粒となる鳥湖を捨つ  
ぬいぐるみ離さず春の野に転ぶ

初句会 植村蘇星

遠回りするも人道年の暮  
ほのぼのと靈氣漂ふ初山河  
共存の足音軽き初詣  
戒めの運勢確とおらが春  
鹿の子衆詠み読む笑顔初句会

俳 縁 北川孝子

やはらかき祖母でありたし松の春  
心の火点して迎ふ春睦月  
初日燦俳縁といふたからもの  
迷ひなき八十路の行く手を恵方とす  
両手の荷師走の重さと思ひけり

淑 気 直江裕子

一握の父の骨曳く冬の波  
裸木の一枝野太き父の声  
芹の青根つこの先までがふるさと  
ポニーテールの淑気きりきり髪結ぶ  
人寄ればまんじゅうこわい女正月



神麓集

取り乱す 高木晶子

御簾の奥身を乗り出して鞠始  
傾いて幹の赫く寒入日  
春小袖樹ごころすでに入れ替る  
春風にわが顔かたち取り乱す  
真青な空そこにあり蓬の芽

梟の樹 伊藤希眸

沈丁の蕾不足のない暮し  
河豚鍋や不義理を詫びる低き声  
梟の樹切られて久し電車の灯  
霜柱百歩の足うら貫きぬ  
寒林の天まで寂し背で歌ふ

粥柱 木戸渥子

初水固有名詞が喉の奥  
冬眠るけもの羨みあと一句  
着ぶくれてインスピレーション湧きにくい  
切り傷や十指に足りぬ数へ日よ  
既往歴はファイルにしまひ粥柱

シンガーミシン 奥田筆子

仕事始シンガーミシンの曲線美  
コンビニに庇がなくて寒の雨  
自動ドア寒しそこにあなたが立つせいで  
本貸してあげたいたくない石路の花  
初フライト未来しかない空無限

年歩む 井上菜摘子

霏霏と雪連弾の腕ぶつかりぬ  
わたむしに諸般の事情ふみこまぬ  
万歳や唱和してからが寒い  
剽軽のふりもここまで鬼をこぜ  
生きるとは音立てること年歩む

無題 村田あを衣

無題といふ絵画をかけて冬籠  
煩惱を落葉だまりに羅漢寺  
流木の返らざる日々年惜しむ  
冬うらら小言ぎらひの母と和す  
借り傘を返へし極月締めくくる



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

雪降るか狂はぬほどの赤を着る

習志野 上野 紫泉

大寒や終活といふ匙加減

晩学の礼と願ひを除夜詣  
行く雲も流水さへも年新た

鎖骨なづ抜けてだしてゆく余寒かな

初風呂や小窓へ光溢れさせ

少しづつ捨てゆく遺品花菜摘む

初釜や真行草の所作学ぶ

ダンブ発つ陽炎を積み残しては

青 梅 金子 野生

鐘の音の水に溶けゆく除夜のごゑ

頭角を現せし後の露の臺

若水や箸置き六つ朝の膳

寂光のなか白梅の淡き蒼

オハイオ 水谷 直子

桜の芽見つけてよりの風そぞろ

窓の外紅葉の会話ひそひそと  
はらはらと紅葉互いのさようなら

底抜けの空へ放水出初式

草 津 倉橋あつ子

手にとれば紅葉いろいろ風の徑

比良よりの恵みの水ぞ去年今年

窓からの枯木の眺め空遠し

予報雪ゆき・ゆき・ゆきの一日かな  
風邪の児を抱きてあやす母も風邪

札 幌 野村 鞆枝

今年こそ転ばぬ覚悟雪しまき

冬ぬくし匂ひいつまでパンの焦げ  
冬うららお箸で崩すハンバーグ  
くるくるともみぢの一葉メランコリー  
松 戸 岡山 敦子

雪晴れや八百万の神在ますごと

凍て空の青のキヤンバス雲流る

凍空に獲物求めて鳶三羽

酒 田 藤波 松山

さくと切るりんごの蜜の流れ出る

庭枯るゝ無人の家の神拜み

傷癒す湯や歳晩の海潮音

行く年の思ひそれぞれ風の中

船 橋 元橋 孝之

鋤焼の鍋に家族の歴史染む

電飾をまとふ闇夜の枯木立

主亡き庭に向き合ふ今朝の春

浪 川 東 秋茄子

男ならなりたくは無し枯芒

寂しさを徒然にして三ヶ日

冬至の湯黄色に染まる身のひとつ

屠蘇祝ふ一人の盃を重ねたり

さいたま 神田 惣介

言ひたげな目の別れゆく冬木立

正月の料理少なめつゝましく

はつきりと妻極月の貌となる

煤逃げの二回りせし山手線

友の死を告げる電話や窓は霧

鉄塔をたてがみとして山眠る

枯木立どこより何の風の音

名利の帰路は裏道秋の鐘

東 京 丹羽 武正

冬至来る縁しみじみわが句歴

落葉踏み語りし朋は既に逝き

キユーボラの街は友待つ冬の朝

夢を追ひ冬天高く賢者逝く

贈物揃へ孫待つ聖樹かな

千 葉 高野 春子

龍の玉利久ねずみの色増せり

散骨のやうな淡雪逢ひにゆく

梅一樹夕月とゐる塞の神

天神さま雑沓闊歩春着の子

磯の香の後部座席や啄木忌

布川 孝子

初糶や袋の中の覗きあひ

梅一樹夕月とゐる塞の神

岸上 道也

白息や子の手をつつむまあるき眼

雨上がるばちんと鳴つたしやばん玉

雪止みぬ陽の橋架かる水平線

けあらしや幽霊船の現はるる

白息や子の手をつつむまあるき眼